

与謝野晶子はどのように 「記憶」されたか

——戦後の堺市における顕彰活動に注目して——

松澤俊二

はじめに

2018年12月7日、堺市内では当地出身の歌人である与謝野晶子（1878-1942）の生誕を記念するイベントが多数開催されていた。たとえば「生誕140年の集い」（与謝野晶子倶楽部主催）、あるいは「与謝野晶子生誕祭」（市民有志らによる実行委員会主催）などだが、後者ではバースデーケーキまでが用意され、その日が盛大に祝われた¹⁾。

2015年の市政モニターアンケートでは、晶子を含む地域の先人を「堺のなかで世界に誇れると思う文化」と考える人は80%を超えた²⁾。現在の堺に、晶子を名誉ある先人として認識する人の多いことは、こうした結果からも疑いないことと思われる。

しかし、堺の人々と晶子との関係は必ずしも円満に過ぎてきたわけではなかった。戦後間もなく堺を訪れた研究者新聞新一は、そのときのことを次のように記す。

キーワード：与謝野晶子，堺，記憶，顕彰，短歌

「明星」の女王を生んだ堺市，それをいわば近代日本浪漫主義の発祥地の一つであり，近代短歌史を論じ，与謝野晶子を云々する研究家の一度は踏むべきメッカであるかも知れない。しかし，現実には，堺市は中世以来の数百年の古い伝統を背負いつつ，大阪の衛星都市として，また近代化した商工業都市として栄えているが，戦災を受けて，その古い相貌は一変しようとしている。恐らく，夢と懐古趣味とを求めて来る巡礼者には失望を与えるにすぎないかも知れない。駿河屋は，昭和十七年頃既に廃業の憂目にあっているのみならず，戦禍には焼け去って何もない。堺市民の一般の人々に晶子のことを聞いても知る人も少ない。

「駿河屋考」(「短歌研究」1951・1)

当時，晶子の生家駿河屋はすでになく，晶子について知るものも〈堺市民の一般の人々〉には少なかったという。この状況と，現在の晶子評価との落差には驚くばかりだが，実はこの問題は，人々の晶子についての記憶の質の違い，想起の仕方の相違とも捉え直すことが出来る。では，どのようにすれば，そのことを可視化できるのか。そして，晶子に関わる記憶の創出と受容に関わる諸問題を検討することができるのか。

今日，記憶に関心を寄せる論者たちは，それを言説実践やメディアによる表象によって現在の時点から再構成されたものと捉える。また，記憶は各集団のさまざまな想起によって生まれるため，多様で，ときに互いに矛盾さえするという³⁾。晶子についても，戦後間もないころから人々による熱心な顕彰活動が行われ，無数の言説とメディアによる表象が重ねられてきた。その様子は，たとえば，平子恭子「没後史」(『年表作家読本 与謝野晶子』1995，河出書房新社)，白桜忌二十年史編纂委員会編『白桜一与謝野晶子と堺・覚応寺』(2003，覚応寺・白桜忌奉賛会)，太田登「与謝野研究の道標」(『与謝野寛晶子論考 寛の才気・晶子の天分』2013，八木書

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

店)、与謝野晶子倶楽部編・発行『潮の遠鳴り』(2017)などに詳らかに記されている。

先の記憶に関する論者たちの指摘をふまえるなら、現在の堺の人々の晶子に関わる記憶も実は多様であり、戦後にその記念や顕彰を目指した人々による無数の表象行為によって再構成された可能性が浮上する。ならば、顕彰活動を対象に、晶子を表象するメディアや行為、たとえばその人を想起させようとするモニュメント(歌碑、立像、記念館等)やイベント、儀礼などを検討することで、地域におけるその記憶が多様に創出される過程を明らかにできるのではないか。さらにそこから、それらの人々がどう受け止めたかという受容の問題についても考察を進めることができよう。

ところで、従来の諸研究は晶子の生涯や短歌作品、評論の内容等に注目するものが多く⁴⁾、没後の諸問題について考察したものは少なかった。わずかに新聞新一、香内信子⁵⁾、また自身も顕彰活動に加わってきた入江春行らの諸論があるばかりである。ただし、本稿は堺という地域における晶子の多様な想起のされ方、その記憶の諸問題に焦点を当てており、それらとは論点が異なる⁶⁾。この点で本稿にもいささかの存在意義があらうかと思う。

1

はじめに、戦前・戦時下の堺で晶子がどのように人々に記憶されていたか確認しておく。

三宅明子は戦時下における堺高等女学校(*晶子の卒業した堺女学校の後進、現在の府立泉陽高校)の一授業の様子を次のように証言する。

その先生が黒板に、

海恋し潮の遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家

と

やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君
を書かれて「うちの卒業生」と言われてサッとすぐに消してしまわれま
した。学校側からは伏せるように命じられていたのかもしれませんがね。
…（中略）…自分にはこれ以上教えられないとご存知だったのしょう
ね⁷⁾。

国語の担当教員は、その有名な卒業生を独特の仕方で表現した。晶子の
短歌二首を黒板に書き、しかしすぐに消すことで、彼女について語ること
が不都合であることを生徒たちに示唆した。なぜ不都合なのか、引用後半
部は三宅の憶測だが、確かに戦前・戦中期の堺高等女学校では晶子に言及
することは歓迎されなかったようである。たとえば山縣侘子も、晶子の名
は〈全く無視され在学中何も知る事なく過ぎました〉と証言する⁸⁾。また
晶子の縁者阪上友子も次のように言う。

女学校時代は「私は晶子の血縁だ」なんて絶対に言わなかったし、家
でも「言うな」と言われていました。昭和五年卒の私の姉はまだ晶子のこ
とを話せたようですが、私は戦争下の女学生で、とても晶子のことは口
に出せたものではありませんでした。家では「君死にたまふことなか
れ」の話と、堺を出たときのスキャンダルとの二つで、「親類だとい
うことを言うな」と言う雰囲気でした⁹⁾。

阪上は晶子について口外することを家族から禁じられていた。鉄幹との
不倫も絡む離郷の事情と、さらに「君死にたまふことなかれ」の内容に関
わってのことという。

このように戦前、晶子の縁者たちはその人について口をつぐむことを選

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

んだ。また、戦後になっても地域のある人々は晶子を醜聞にまみれた〈不良少女〉と認識していた¹⁰⁾。佐藤多賀子は〈晶子の存在自体が自分たちの「恥部」として忌避されていた〉のではないかと推測している¹¹⁾。堺におけるその評価が長く停滞していたのは、かかる人々の晶子の記憶の仕方、感情の問題が関わっていた。

2

1949年は〈晶子顕彰がはじめられた年〉とされる¹²⁾。同年5月29日（*晶子の八回忌）に東京で行われた晶子祭が先駆けとなり、関西新詩社同人による「与謝野寛・晶子追慕の会」（京都・鞍馬寺）、「晶子を偲ぶ会」（和歌山・高野山）などが開催された。この頃、研究や出版の分野でも晶子の再評価が始まりつつあった¹³⁾。

堺における顕彰の開始は翌1950年11月3日を待たなくてはならない。このとき市はその文化祭において晶子を「物故文化人」10名のうちに加えて讃えた。戦時下では、公に語ることをはばかられたその人物は、一転して記念すべき対象となった。

堺市は、「物故文化人」10名に晶子を加えた理由を、その人が〈堺が生んだ歌壇の明星〉であること、〈幾多の著書を公にし、後進の指導に力を致して、其の功績は万人の普く知悉する処である〉とのみ記している¹⁴⁾。このコメントからは市が著述家としての晶子进行评估したことはわかるが、それ以上はわからない。では、そもそもなぜ市はこのタイミングでの顕彰を開始したのか。理由として二つ考えられる。

一つは、他地域での晶子再評価の気運が高まったことと関連する。先述したように前年1949年には東京などで三つの晶子関連イベントが開催された。晶子祭の主催者だった深尾須磨子（*詩人、晶子に師事）は、そのイベントの直前に堺を訪れ、そのときの感想を「毎日新聞」に寄稿している。

記事で深尾は晶子を〈世界平和と女性解放のために戦い抜いた〉、〈世界人類に誇るべき敗戦日本の一大至宝〉と称える¹⁵⁾。しかしそれにも関わらず、堺では師の顕彰が進まない現状をいぶかしむ。そして、〈堺市では、何をもってその光栄に報いるべきであろうか〉と積極的な対応を促している。市側も晶子祭に安西冬衛（* 詩人、当時市役所に勤務）を派遣するなどしてその様子を見聞させているが¹⁶⁾、こうした外部からの晶子評価の高まりは市にも刺激を与えたと考えられる。

また、晶子を再評価することは国の政策とも方向性が合致していた。市が晶子を顕彰した場がその文化祭だったことに注目したい。敗戦後、日本は「新日本建設の教育方針」（1945・9・20）を掲げて「文化国家」の確立を目指した。そのための具体的な実践を担ったのが各地の文化運動、社会教育政策だった。市の文化祭もその一環だった。

当時の「文化国家」論の性格について先行研究は三点を指摘している¹⁷⁾。平和と結びついていること、その担い手は国民ないし民衆であること、個人を尊重するものであることである。これらの観点から見れば、戦前における晶子のマイナス評価は見事に反転する。「君死にたまふことなかれ」は戦争を厭い平和を希求するものと読めたとし、晶子自身は芸術院や文化勲章などとも無縁のまま在野の歌人として生きた。また彼女が夫の鉄幹とともに「自我の詩」を志し、実践したことも文学史的事実だ。そうであれば、晶子のあり方は戦後日本が標榜する諸価値と矛盾せず、むしろスムーズにそれと接合する。こうした思潮の変化が市の顕彰を後押ししたと見ることができる。

けれども、堺の「外」から促された、あるいは国家政策と結びついて進められた「上」からの顕彰が、地域におけるその評価を一変させたとは考えられない。1950年の市民文化祭以降も晶子の記念館、歌碑建設などの話が持ち上がったが、いずれも霧消している。〈晶子は郷土とほとんど没交

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

渉で堺のために何一つしなかった〉などの批判の声も聞かれたという¹⁸⁾。顕彰を本格化させるには、晶子に対して人々が抱く〈不快の念〉をまず和らげる必要があった¹⁹⁾。

1961年は晶子の没後20年にあたる。この年、堺市と市の教育委員会、さらに江村峯代（歌人）、大野翠峰（俳人・郷土史家）、松本壮吉（郷土史家）らが共同して晶子の歌碑の建立と遺作・遺品展を計画し実現している。これらの企画は、江村ら民間人が市に提案したもので、人々は資料作成、関連企画の準備等に積極的に関わった²⁰⁾。その意味で、市が主導した50年の顕彰とは性質を異にしている。

この一連の取り組みは晶子についての市民の記憶を再構成するうえで重要な契機となったと考えられる。なぜそれが重要だったか、モニュメント（歌碑）、記念の刊行物、碑の除幕式におけるスピーチの三点に注目して説明したい。

まず、モニュメントには「海こひし潮の遠鳴りかぞへつゝ少女となりし父母の家」が刻まれた。設置場所は生家駿河屋の跡である。家屋は空襲により失われていたが、碑はその焼け跡が、晶子がかつて少女時代を過ごした特別な場所であると人々に想起させた。教科書で学ぶ著名な人物とそこで生まれた少女が同一であることをはじめて認識した人もいた²¹⁾。

次に、記念の刊行物として堺市教育委員会編・発行『堺と与謝野晶子』（1961）が配布された。ここには江村や大野らが収集した晶子の短歌が多数掲載されているが、それらはいずれも堺に関連する作品だった。つまり、それらの歌は晶子がいかに故郷に愛着を持っていたかを示している。また、冊子の刊行目的には〈一般市民啓蒙に役立つ〉ことが掲げられた。冊子は、これまで晶子と堺とを切り離して考えていた市民に対して、その記憶を更新するように迫るものだった。

碑の除幕式には当時の堺市長河盛安之介が出席した。その式辞において

河盛は〈堺の多数市民〉がかねてより晶子を〈暖かく評価してなかった〉ことを認めた。かつ生前の晶子自身も郷里の人情・風俗を厳しく評していたことに触れた²²⁾。相思相愛とは必ずしもいえなかった両者の過去に言及したのである。しかし、晶子が没して〈二十年の歳月〉を経て〈世代の一変してしまった堺市民〉は今や〈素直にその真価を知り、堺市の生んだ輝かしい人として慕い、且つ誇りとしている〉と述べる。その〈我々の心持ち〉を〈晶子の霊〉も〈諾って下さるもの〉と発言して、〈後進郷党の懐旧と追慕の心持〉を表明した。

市長によるスピーチは、地域の一人一人を〈堺市民〉、〈我々〉といった共同体へと集合的に統合し、人々の晶子に対する複雑な感情を〈懐旧と追慕〉という、暖かなそれへと読み替えるものだった。このとき晶子は〈堺市の生んだ輝かしい人〉として地域の公的パブリック・メモリーな記憶に位置づけられたのである。

3

堺において晶子の記憶がどのように創出され、また受け止められてきたか。歌碑や立像等のモニュメントは、これらのことを考察するための好資料といえる。試みに、次頁の【表1】では2018年現在、堺市内に現存するモニュメント計26基を設立年順に整理した。

表を概観して言えば、1961年の(1)以降、2016年まで、およそ2年に1基の割合でモニュメントは増加した。また、設置者では初期には「与謝野晶子の会」の尽力が目立つが、次第に地域の学校、社寺、商工業者などもそこに加わった。「与謝野晶子の会」は〈与謝野晶子の業績を顕彰し、これをよすがとして堺の文化興隆をはかる〉ことを目的とした熱心な人々の集まりだから²³⁾、それ以外の人々が活動に加わるようになったことは、その業績が広く認知されてきたことの証左だろう。

【表1】 堺市内の品子関連モニュメント一覧

碑文	場所	設置者	年月
1 海こし潮の遠鳴りかぞへつ、少女となりし父の家 ふふよとの和泉の山をきはやかに浮けし海より朝風ぞ吹く	生家跡	堺市教育委員会	1961・5
2 劫初より作りいとなむ職堂にわれも黄金の釘ひとつ打つ	浜寺公園	与謝野品子の会	1966・7
3 その子はたちくしにながらくちろかみのおごりの春のうつくしきかな	本願寺瑞別院	与謝野品子の会	1968・5
4 あ、をとうよと、君を泣く、君死にたまふことなかれ(…後略)	寛王寺	与謝野品子の会	1971・5
5 堺の津南藍船の行き交へば春秋いかに入りまじりけむ	泉陽高校	同校同窓会	1971・10
6 朝ほらけ羽ごろも白の天の子が乱舞するなり八重桜ちる	中央図書館	与謝野品子生涯100年記念事業 委員会	1978・10
7 花の名は一年草もある故に忘れず星は忘れやすかり	羽衣学園大学	羽衣学園保護者会	1986・10
8 山の動く日きたる、かく云へど、人これを信ぜし。(…後略)	大仏公園	大阪南部花商組合	1986・11
9 母として女たるの身をば裂ける面に清まらぬ世はあらじぞ思ふ	堺市短期大学	品子をうたう会	1987・4
10 菜種の香古き跡をひたすらすむ踏ままほしけれ殿馬場の道	堺市民会館	品子をうたう会	1987・5
11 をとうとはをかしおどけし紅き頬に涙流して笛ならうさま	中要町、大通筋傍	フジサンケイグループ	1990・7
12 すべで眠りし女、今ぞ目覚めて動くなる * 立像	少林寺小学校	少林寺小学校	1993
13 ふるさとの潮の遠音のわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲 * 立像	女性センター	堺市女性団体協議会	1994・2
14 地はひとつ大白蓮の花とみぬ雪のなかり日のほるとき	堺駅	堺陵東ライオンズクラブ	1998・5
15 少女子の祈りの心集まればまほしてマリヤの御像光る	女性センター	堺市女性団体協議会	1998・10
16 堺の街の妙国寺、その門前の包丁屋の(…後略)	賢明学院中学高等学校	賢明学院高等学校	2000・2
17 金色のちひさき鳥のかたちして鎮杵ちるなり夕日の間に	妙国寺	妙国寺住職園部泰鑑	2002・12
18 和泉なるわがうぶすなの大鳥の宮居の杉の青きひとむら	金剛高等学校	同校卒業生寄贈	2003・2
19 和泉の山の茸狩の思ひ出は、十二三の年になりますまで(…後略)	大鳥神社	与謝野品子俱樂部	2006・12
20 ちぬの浦いさな奇なるをちかたははひねもす霞む海恋しけれ * 他1首あり	神谷小学校	同校100周年記念事業実行委員会	2007・11
21 人とわれおなじ十九のおもかけをうつけし水よ石津川の流れ * 他1首あり	淡駅	地元商店会有志	2009・5
22 住の江や和泉の街の七まちの鍛冶の音きく菜の花の路	石津神社	同社社職鍛冶造管20周年記念事業 実行委員会	2010・11
23 大和川砂に渡せる板橋を遠くおもへと月見草咲く	水野鍛錬所	同所当主水野康行	2010・12
24 寛から品子へ、かく師友の大恩に(…後略) * 「品子から寛へ」もあり。	浅香山緑道	大和川に与謝野品子の歌碑を たてる会	2013・9
25 少女たち開日口の神の轡の木の若枝さますごとのびて行けかし	さかい和品の杜	与謝野品子俱樂部	2015・3
26	開口神社	堺観光ボランティア協会	2016・5

* 与謝野品子俱樂部編集・発行『新修版 与謝野品子歌碑・文学碑めぐり 堺市内』(2015)をもとに作成。

与謝野品子はどのように「記憶」されたか

同様のことは碑の設置場所をみても肯われる。建碑地は当初、生家跡や泉陽高校、浜寺（*鉄幹との曾遊の地）など晶子に直接ゆかりがある場所が選ばれた。けれども、やがて図書館や市民会館、女性センター、大仙公園など堺を公的に代表する場所にも建てられていく。地域におけるその評価が好転していったのでなければ、これらの場所に碑が立つこともなかったはずである。

では、これらのモニュメントは、晶子についていかなる記憶を想起させようとするのか。第一に指摘すべきは、多くの碑は短歌を刻み、その内容から晶子と地域との親密な関係性をイメージさせようとするのだ。

【表1】の番号で（1）、（2）、（6）、（11）、（14）、（17）、（19）、（21）から（24）、（26）などでは、それぞれ〈父母の家〉〈ふるさとの和泉の山〉、〈堺の津〉、〈殿馬場の道〉〈妙国寺〉、〈大鳥〉、〈ちぬの浦〉、〈石津川〉〈住の江〉〈大和川〉、〈開口〉などが詠まれる。歌で晶子はそれらの土地を追想し、懐旧の情を吐露し、あるいは故郷に暮らす後進の少女に呼びかける。このように歌碑は晶子の郷里・郷党に寄せる思いを可視化して、その土地への愛着を明るみに出す。もちろん、堺への複雑な感情がそこに書き込まれることはない。してみれば、それらの碑は晶子と堺との和解を人々に想起させるメディアとなっていよう。

第二に、モニュメントは晶子その人だけでなく、晶子が暮らしていた頃の堺を人々に想起させた。（1）の歌碑をめぐる詠まれた無数の歌や句がその証左となろう。例えば、「碑に立てば潮騒遠しうたごころ」（榎敬介）、「潮騒も遠くなりたる街中に君が残せし歌の碑の立つ」（川崎京子）、「くるまの群ゆきかいけぶり海鳴りも死にたるここへ碑は建ちにけり」（玉置幸孝）などである²⁴。こうした作品から、歌碑を見た人々の反応の一端をうかがい知ることができる。人々は潮騒の聞こえたかつての堺を想起し、かつ、そうした過去の堺と都市化を進める現在の地域とのギャップにも思

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

い至っている。

確かに堺は戦後、その環境と空間を大きく変容させた。戦災からの復興計画のなかでは街路の拡幅や町区画の変更が行われた。1961年からは堺泉北臨海工業地帯の造成、64年には堺の環濠を形成していた土居川などの埋め立ても開始された。こうした環境変容の結果として水質汚濁、スモッグの発生などが当時次々と報告されていた²⁵⁾。

こうした状況のなかで、61年建立の(1)の歌碑は、変容する地域の現状を相対化するための一つの根拠としても人々に受容されていたものと思われる²⁶⁾。このように、モニュメントは晶子が見聞きした過去の地域を「記憶」として可視化して、人々に現在の堺を捉え直すための視座も提供した²⁷⁾。

第三に、モニュメントには、地域に関わりなく、より普遍的なメッセージを含むものがあつた。たとえば、堺市民会館に設置された(10)には「母として女人の身をば裂ける血に清まらぬ世はあらじとぞ思ふ」が刻まれた。その歌は母性の重要性や女性の潜勢力に注目するよう人々に訴える。ただし、こうした性格の碑は土地との関連性がほとんど無く、むしろ晶子の主張や思想を前景化させるだけに、場合によっては人々の反発を呼び込む危険性も包含していた。

例をあげれば、1971年に泉陽高校に設置された(5)のケースである。ここには「君死にたまふことなかれ」が刻まれたが、設置に至る段階で碑文の内容についての争論があつた。顕彰を進める実行委員会に〈詩がよくない〉との批判が寄せられたのである。

「あんな反戦の詩を府立高校の校庭の碑に刻むとは何と云うことだ。晶子顕彰碑だけで十分ではないか」とのこと。この意見を聞かれた方々から、同じような反対論が、電話で、口頭で、噂で次々と伝わってきた、

ある日堺東を歩いていた私はある後輩に出合ったが、彼は、碑文に対する強硬な反対が根強いことを私に話され、ぜひ他の作品をとのことであった²⁸⁾。

実行委員の一人、冠木富美の回想によると、ある人たちは晶子の顕彰には同意しながらも〈反戦の詩〉を刻することには明確に反対した。委員らはその反応に懊悩するが、職員会議を経て詩の内容の重要性が再確認され、当初案通りに建碑が決定した。

当時の大杉政之祐校長は建碑について〈人間の命を大切にする晶子のあの精神が今ほど大切な時代はない。晶子は勇気ある人として教育の面からもっと取り上げてよい〉と述懐している²⁹⁾。このときの人々の対立は〈今〉、つまり70年代初頭という政治の季節を背景に、戦争や国防についての考え方の違いが露頭した結果、起こったとも言い得よう。だが本稿の観点からみて重要なのは、この論争が晶子の業績のなかでどの面を地域における公的な記憶として残すのかという問題でもあったことである。議論の結果、〈人間の命を大切にする晶子のあの精神〉が重要視された。そして同校はこの詩を「公的な想起のレパートリー」の一つに加え³⁰⁾、〈勇気ある人〉としての晶子を記念することを選択したのだった。

4

本節では1980年代に着目する。その時期、地域には「白桜忌」などのイベントや「晶子をうたう会」、「泉北教養講座」、「堺市女性団体連絡協議会」などの諸団体の活動が次々と展開し、それぞれの仕方で晶子について想起する／させる取り組みを行った。これら諸団体の概要および活動は、シー・ディー・アイ編・発行『与謝野晶子関係基礎調査研究報告書』（1991）を基に以下に整理した。

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

【表 2】

名称	白桜忌実行委員会	晶子をうたう会	泉北教養講座	堺市女性団体連絡協議会
設立年	1982	1983	1979	不明
目的	晶子を偲び、晶子の文学を顕彰すると同時に、地域文化の向上・交流をはかる。	書籍離れの進む現状において晶子を知り楽しむ機会を人々に与える。	泉北ニュータウンにおいて主婦たちの手作りの学習の場として発足。	地域の女性団体間の連絡をとり、女性の地位向上と健康で文化的な生活に民主的に貢献する。
活動内容	「白桜忌」の実施（法要、短歌朗詠、講演、歌碑めぐりなど）	<ul style="list-style-type: none"> ・リサイタルの実施 ・歌碑建立 	<ul style="list-style-type: none"> ・与謝野晶子展の開催 ・晶子に関わる講座の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・晶子に関わる講座の実施 ・機関誌で晶子を取り上げる ・女性問題対策部での晶子研究
参加人数	150～180	1200ぐらい	毎年200名以上	不明

この【表 2】より興味深い点を挙げれば、まずは活動の大規模化であろう。100人、ときに1000を越える人々が活動に加わるようになったことは、60年代以降の地域における顕彰の積み上げに加えて、小説やドラマ、映画などでも晶子がしばしば取り上げられたことにも起因すると思われる³¹⁾。

また、諸活動には多くの女性たちが関与していたことも指摘しておく必要がある。政井孝道はこの80年代中頃を〈晶子顕彰が勢いをみせるようになった〉時期と概括するが、その原因としては、晶子の詩「山の動く日」が女性の地位向上を目指す「国際婦人年」の世界的ムーブメントのなかで注目されたこと、また二つめに晶子の社会評論家としての仕事が見直され、その人の生き方自体が〈現代女性を強くとらえ、再評価されはじめた〉ことが重要だったと記す³²⁾。

実際、当時の堺で行政にたずさわっていた佐藤多賀子は「山の動く日」を知ることで〈晶子は短歌だけでなく女性の自立に関していろんなことを提言していたこと〉に〈はじめて目が開かれた〉といい³³⁾、また市内で社会教育に関わっていた福井絢子も〈子育てと仕事を続け共働きをするなか

で、自分の生活そのものが学習の対象〉であるという確信を〈晶子を学ぶことによって得てきた〉と述懐する³⁴⁾。

80年代初頭のこの時期、アカデミズムの晶子研究も〈作品論主流〉から〈女性学見地からの研究〉へ移ろうとしていた³⁵⁾。こうして母、妻として生きつつ女性の自立を訴え続けたその姿が先進的な人々の意識のなかに浮上する。では、この新しい晶子像がどのように人々に共有され、記憶化されていったのか。

モニュメントは依然として重要なメディアだった。ただし、ここにきて従来の歌碑とは一線を画したものが登場している。特に注目すべきは【表1】で(13)のような立像が現れたことだ。自作の詩を朗読する晶子の姿を象ったものという³⁶⁾。像は洋装をして、つば広の帽子をかぶり、冊子を持ちながら、少し腰をひねってスカートのドレープを波立たせている。とりわけて女性身体であることを強調するかも見える。台座に刻まれた「すべて眠りし女、今ぞ目覚めて動くなる」(「山の動く日」)の詩句と併せて考えれば、晶子が女性であることを改めて印象づけながら、未だ「眠りし女」たちに未来への希望を託すかのようだ。こうしてモニュメントは、女性センター(女性の社会参加を支援する施設)に設置されるにふさわしい表現を保持している。

またこの時期、人々が晶子を想起する／させる仕方はバラエティに富んでいた。【表2】で見たような「泉北教養講座」、「白桜忌」、「堺市女性団体連絡協議会」などの取り組みはどれも興味深い、もっとも大がかりな想起の試みとしてコンサートという形式に注目する必要がある。

「晶子をうたう会」は83年に堺市民会館で初のコンサートを開催した。以降、イベントは恒例となり毎回1500人ほどの観衆を集めたという³⁷⁾。「君死にたまふことなかれ」など晶子の作品を歌唱するこの会について、八木三日女(会の代表世話人)は次のようにいう。

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

私達は昨年同様“晶子をうたう”ことによって、その愛と情熱と、したたかな生活力を、己の胸の中につよく呼びもどそうとしています。「晶子よ帰れ、現代の堺の女性の中に、世界の女性の中に帰れ、“母”の中に“人間”の中に帰れ」と念じつつ唱います。“堺をなご”の心意気で精一杯うたいます³⁸⁾。

二点注意したい。一つは、ここで晶子を想起することは〈うたう〉という身体的な実践を通じて行われるということである。次に、その想起は〈私達〉や〈堺をなご〉全員の目標として集合的に語られていることである。歌い手である女性たちは歌唱により一体となり、かつ〈己の胸の中に〉晶子を呼び戻すことで、その人とも一体化する。ここでの想起は、そのような力強い共感の営みである。

かつてポール・コナトンは身体によるパフォーマンスや儀礼が社会的な記憶を維持・伝達するために不可欠であることを指摘した³⁹⁾。この指摘はこのコンサートにもあてはまるのではないか。そこで経験は、たとえば展示物やモニュメントに対して〈内省的に、受動的で孤立した形で作品を凝視する〉ように臨むこととは異なる⁴⁰⁾。自ら歌うことにより晶子を集団的・身体的に感受すること。そうして、彼女を記憶し続けようという営みである。

5

1989年、堺市は市政100周年を迎えた。「フェニックス都市堺」が新しい町づくりのスローガンとして掲げられ、数々の記念事業が計画された。「C I」（シティ・アイデンティティ＝都市の特性）の確立もその一つだった。市の発行したパンフレットには〈堺市は、伝統的な自由都市である。市民は進取の気風にあふれ、文化人を輩出してきている〉とある⁴¹⁾。そし

て、その特性にかなう一人として、与謝野晶子の名前も挙がっている。かつて「不良少女」ともいわれたその人物は、今や市のアイデンティティーを体現する存在として、公的なお墨付きを得るに至った。

このときの事業計画案には「与謝野晶子記念館建設運動」も掲げられているが、それが実現したのは94年のこと、「与謝野晶子ギャラリー」(~1999)というかたちだった。ギャラリーは、2000年には「与謝野晶子文芸館」(~2015)となり、さらに2016年3月に「与謝野晶子記念館」(「さかい利晶の杜」)として発展する。では、こうした記念施設の誕生は地域における晶子の記憶にどのような影響を及ぼすのだろうか。

一見、それらの施設は記憶の安定化、永続化に寄与すると考えられる。けれども、94年のギャラリーから記念館に至る遷移に注目すると、むしろ記憶の揺らぎとも言える事態が看取できる。

たとえば、現在の記念館の展示コンセプトは〈晶子の魅力を通して堺への興味に繋げ、市内周遊に誘う〉ことである。館内には駿河屋の家屋が再現され、〈市内に点在する晶子ゆかりの地や歌碑を紹介〉するコーナーも作られた⁴²⁾。つまり展示は晶子が堺に生まれたことを強調しつつ、そのうえで館外へ、市域の観光へと人々を誘う。

しかし、前身のギャラリーと文芸館では、晶子が堺に生まれたことを前提に、さらに世界とも関連づけて人々に想起させようとする傾向が顕著だったのではないかと⁴³⁾。このことをもっとも端的に示すのが、チェコの画家でアール・ヌーヴォーをリードしたアルフォンス・ミュシャと晶子の展示を同一館内に併設していたことである。そのことで晶子や「明星」の創作表現が当時の世界的な芸術思潮と密接に関連していたことが示唆されていた。ところが現在の記念館では晶子はミュシャではなく千利休と空間をシェアし「利晶の杜」を構成する。堺にゆかりがあるという以外に両者の関連性は想像しにくい。

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

また、記念館は、より積極的に晶子の記憶を複雑化させるかのようでもある。たとえば、人気アニメ「文豪ストレイドッグス」とのコラボレーションに注目したい。

このアニメに登場する晶子は、あらゆる外傷を治癒する「キミシニタモウコトナカレ君死給勿」の能力を持つ⁴⁴⁾。しかし、記念館はこうした史実からは明らかに乖離した晶子も想起可能な一つのバリエーションとして視野に入れる。缶バッジなどの記念グッズも製作して行ったコラボレーション企画の結果、2016年7月には〈高校生以下の入館者数は昨年同期比で21%増〉との実績を作った⁴⁵⁾。このように記念館は、晶子の記憶のバリエーションを多様化することで、より若い世代を誘引することに成功している。また来館した若者は館内の展示を通じて、従来の歌人、批評家、母としての晶子にあらためて会うことも出来るだろう。

終わりにかえて

1942年に晶子は逝き、現実の身体はこの世から姿を消した。戦後、地域の人々は数々のモニュメントを製作し、またイベントや儀礼を行って、その人を顕彰し記念した。そうした試みのなかで晶子は多様に表象され、その記憶は再構成され続けてきた。記念館などの取り組みを見る限り、今もなお晶子の記憶は複雑化し、多様化し続けている。

対して、一つの〈本来の晶子像〉を求め、その発信を市に期待する意見も存在する⁴⁶⁾。けれども、大局的に見れば、晶子についての多様な表象が地域に好ましい効果をもたらしてきたことも否定できない。人々はそれぞれの価値になかった、それぞれの表象に共感する。そこから議論や学習活動が起り、イベントが企画され、コミュニケーションが生まれる。つまり晶子についての多様な記憶は、多様な価値観を持つ、より多くの人々を包摂し、交流させてきた。もちろん、このことは同様の意味で、観光客の

誘致や市内の活性化にもつながっている⁴⁷⁾。

晶子の記憶が地域にもたらしたポジティブな効果を認めたくえて、今後さらになかなる新しい記憶が顕彰活動や観光振興といった場で創出されていくのか見届ける必要がある。ただし、この点については、後稿を期したい。

注

- 1) 「「140歳」おめでとう 与謝野晶子，生誕祝う記念行事」（「朝日新聞」2018・12・8）
- 2) 質問は「堺の文化の中で，世界に誇れると思う文化はどれですか」というもの。ただし，晶子は千利休，行基らと「堺ゆかりの先人たち」として一括して並べられ，単独での評価ではない。堺市文化観光局文化部文化課編・発行『自由都市堺文化芸術推進計画』（2016）
- 3) 記憶については以下の文献を参照した。大野道邦「集合的記憶」（日本社会学会編『社会学事典』2010，丸善），安川晴基「「記憶」と「歴史」—集合的記憶論における一つのトポス—」（「藝文研究」2008・6），野家啓一『歴史を哲学する—7日間の集中講義』（2016，岩波書店），有山輝雄「問題提起戦後日本における歴史・記憶・メディア」（「メディア史研究」2003・4）。
- 4) 晶子についての研究文献は数多いため代表的なもののみ挙げる。評伝では逸見久美『評伝与謝野寛晶子』（2007-2012，八木書店），香内信子『与謝野晶子—昭和史を中心に』（ドメス出版，1993）など。短歌の評釈では，逸見『新みだれ髪全釈』（1996，八木書店），入江春行による『与謝野晶子』（2011，笠間書院）など。評論家としての晶子を扱うものに山本千恵『山の動く日—評伝与謝野晶子』（1986，大月書店）などがある。
- 5) 香内の1946年から1951年を対象にした「「君死にたまふことなかれ」はどう歌われはじめたか」（『与謝野晶子—さまざまな道程』2005，一穂社）。新聞「歌人晶子の再認識」（「読売新聞」夕刊，1972・5・29），香内「与謝野晶子没後50年の研究展望」（「昭和文学研究」1993・2）などは小説やドラマにおける晶子像のパターン化を論じ批判する。また入江に「与謝野晶子と堺の文化的風土」（木村一信・西尾宣明編『国際堺学を学ぶ人のために』2013，

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

- 世界思想社), 「与謝野晶子にとっての堺」(「大阪春秋」2006・4)がある。
- 6) 他に、晶子と堺の関連を論じた文献に、河井醉峯「晶子さんの堺時代」(「書物展望」1942・7)、吉田弥寿夫「与謝野晶子と堺」(「短歌」1963・1)、明石利代「与謝野晶子と堺」(「国文学」1962・3)、石川美代子「与謝野晶子と堺」(「紀事」2000・5)、たつみ都志「与謝野晶子と堺の町並み」(「与謝野晶子倶楽部」2008)など。
 - 7) 三宅明子「十七年、あの頃私は」より。三宅は堺高女に1942年に入学。(与謝野晶子研究会編・発行『晶子頌』1989)
 - 8) 山縣は1928年に堺高女を卒業。大阪府立泉陽高等学校記念誌編集委員会『泉陽高校百年』(2001, 大阪府立泉陽高等学校創立百周年記念事業実行委員会)
 - 9) 「座談会晶子ゆかりの五郎大茂氏、阪上友子氏を囲んで」(「堺・泉州」1997・4)
 - 10) 〈堺の旦那衆のような方〉の発言として冠木富美が記憶している。「晶子・堺から世界へー白桜忌が拓いた道」(『白桜ー与謝野晶子と堺・覚応寺』書誌は本文内)
 - 11) 「座談会 阪堺電車と堺の観光まちづくり」(「大阪春秋」2011・10)
 - 12) 香内(2005)前掲, 注(5)
 - 13) 再評価の例として、『定本与謝野晶子全集』(ロマンス社, 1950)や『みだれ髪』の相次ぐ復刊などが挙げられる。また、晶子研究も活性化し、堺にも1947年に塩田良平, 新聞新一, 佐藤亮雄らが来訪した。
 - 14) 堺市教育委員会事務局社会教育課編・発行『社会教育』(1950)
 - 15) 深尾須磨子「『平和』に生き抜いた晶子」(「毎日新聞」1949・5・8)
 - 16) 安西冬衛「タンポポのポロネーズ(三)」(『安西冬衛全集 5巻』所収(一九七八, 寶文館書店), 初出は「現代詩」(1949・10)。
 - 17) 中村美帆「文化国家」『文化政策の思想』(2018, 東京大学出版会)
 - 18) 『南大阪新聞』(1953・8・21), 「岡目三目」(「南大阪新聞」1953・8・5)。
 - 19) 島津忠夫は堺で顕彰が停滞したのは〈晶子の出奔に根づよく不快の念をもつ古老たちの考え〉が影響したとする。「与謝野晶子」(『句のない道』『島津忠夫著作集12巻』所収, 2007, 和泉書院)
 - 20) この時の顕彰は江村峯代『晶子拾遺』(1980, 清水弘文堂)に詳しい。

- 21) 江村前掲, 注(20)
- 22) 晶子は「私の貞操観」(「女子文壇」1911・10-11)で, 土地の〈風儀〉の悪さや両親の教育の厳しさを指摘し, また「我子の教育」(『愛の創作』1923, アルス)でもそれらの生育環境を〈不快な境遇〉と断じる。
- 23) 「与謝野晶子の会会則」。注(20)に同じ。
- 24) 堺歌人くらぶ編『おもうところ』(1961, 堺市教育委員会事務局)
- 25) 堺の空間変容や公害の問題については藤井正「堺の地形条件と都市構造」(「大阪府立大学紀要人文・社会科学」1991・3)および小葉田淳編『堺市史続編第三巻』(1972, 堺市役所)を参照。
- 26) 朝日新聞大阪本社宣伝部編・発行『あなたの街の「かいわい近況」』(1980)にも, (1)の歌碑について記した次のような文章がある。「碑の前に立つ。すぐ目の前を, 大型車がうなりをあげて走り去っていく。碑の端が, 車にあてられたのか, 30センチほどえぐられている。その向こうに広がる広大な臨海工業地帯。成長期の晶子が朝夕, 耳にした大浜の海鳴りはもはや想像することはできない。」
- 27) 【表1】で(24)の歌碑を建立した「大和川に与謝野晶子の歌碑を立てる会」は碑を〈大和川再生のシンボル〉として位置づける。その歌がかつての川の姿を記憶すると考えるからである。澤井健二「お礼のごあいさつ」(大和川に与謝野晶子の歌碑をたてる&大和川市民ネットワーク事務局編・発行『大和川に与謝野晶子の歌碑実現報告集』(2014)
- 28) 冠木富美「泉陽高校晶子詩碑の回顧」(大阪府立泉陽高等学校創立90周年記念事業実行委員会編・発行『大阪府立泉陽高等学校創立90周年記念誌』1991)
- 29) 清水美智子他編「会報39号」(1983・11, 東京女子大学同窓会関西)
- 30) 安川晴基「ホロコーストの想起と空間実践—再統一後のベルリンにみる「中心」と「周辺」の試み」(「思想」2015・8)のなかの表現をお借りした。
- 31) 小説に田辺聖子『千すじの黒髪』(1972, 文藝春秋), 永畑道子『華の乱』(1988, 新評論)など。それぞれ後年ドラマ化, 映画化された。
- 32) 政井孝道「与謝野晶子をめぐる『堺と世界』」(『白桜—与謝野晶子と堺・覚応寺』書誌は本文内)
- 33) 「晶子・堺から世界へ—白桜忌が拓いた道」(『白桜—与謝野晶子と堺・覚

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

応寺』書誌は本文内)

- 34) 福井絢子「晶子を学び続けて、いま」(『山を仰ぐ—晶子を学び続けて』(1994, 自家版)
- 35) 入江春行「与謝野晶子研究史展望(改稿・転載)」(「与謝野晶子研究」1992・12)
- 36) 与謝野晶子倶楽部編・発行『与謝野晶子歌碑・文学碑めぐり新修版』(2015)
- 37) 八木三日女『『晶子をうたう会』小史』(春木吉彦編・発行『堺のうた堺の詩歌俳人』1994)
- 38) 「晶子をうたう会について」(晶子をうたう会編・発行『Akiko. Yosano Recital』1984)
- 39) ポール・コナトン『社会はいかに記憶するか』(芦刈美紀子訳, 2011, 新曜社)
- 40) パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門—アートが社会と深く関わるための10のポイント』(SEA研究会訳, 2015, フィルムアート社)
- 41) 堺市制100周年記念事業推進委員会編・発行『フェニックス堺21—伝統と創造』(1987)より。
- 42) 森下明穂「与謝野晶子記念館ができるまで」(「さかい利晶の杜学芸だより」2016・3)
- 43) 「世界」が1990年前後に特に意識されていた背景には、94年に関西国際空港開港が予定されていたこと、またそれをにらんで87年の市の100周年記念事業には「世界に誇れる町づくり」が目標として掲げられたことなどがある。92年開催の国際詩歌会議の副題にも「堺の晶子から世界の晶子へ」が掲げられた。
- 44) 左柄みずき『文豪ストレイドックス公式国語便覧』(2016, KADOKAWA)
- 45) 「文スト×堺の記念館若者呼べ晶子の戦い入館増に効果」(「読売新聞」2016・11・29)
- 46) たとえば市議会議員の水ノ上成彰は〈私の抱く与謝野晶子像〉について議会で発言し、HPでも発信する。〈欺瞞に満ちた〉、〈ゆがめられた与謝野晶子像〉が多くあるとして〈堺みずから、本来の晶子像を広めていく努力〉

をすよう求める。同氏HP「堺市議会報告議会発言集 平成17年12月議会
大綱質疑」(<http://www.mizunoue.com/coucil/17-12-taikousitugi-coucil.html>)
2018・12・8 閲覧)

- 47) 市内の山之口商店街では晶子の歌を書いたフラッグを掲揚し、人々を迎え
る。また、2018年12月現在、市内の開口神社では「文豪ストレイドッグス」
とコラボレーションした絵馬を販売している。

与謝野晶子はどのように「記憶」されたか

How Akiko Yosano has been Memorized?: Focusing on Commendation in Sakai City after the World War II

MATSUZAWA Shunji

Sakai City, Osaka Prefecture is the birthplace of Akiko Yosano. Akiko is now considered to be a symbol of the local identity, and many commemorative events are held. However, before the war, Akiko was also recognized as a “bad girl” and was not always welcomed by the people of Sakai.

The focus of this paper is on how Akiko was remembered by the local people after the war. In particular, this point will be made clear by various awards activities held in Sakai, such as making monuments and memorials, and examining their performances. Then, the transformation and variety of Akiko’s image are also shown. It also discusses the important significance of the region remembering Akiko.